

山陰道・益田－萩間の整備に期待



まつなが・かずひら

1954年生まれ。73年、父親らとともに農事組合法人松永牧場を設立し、84年に代表理事に就任。肥育、酪農、繁殖を組み合わせた先進的な経営で、全国有数の規模に拡大。2013年に株式会社化し、代表取締役となる。益田商工会議所副会頭、全国肉牛事業協同組合副理事長を務める。

松永牧場代表取締役 松永和平さん (益田市)

益田－萩間の191号は、豪雨のたびに通行止めになります。

特に昨年7月末の豪雨時は大変でした。191号が不通となり、萩牧場（萩市中小川）につながる道路も橋が流されるなどし、牧場は「完全孤立」に陥り、電気も止まりました。牧場の重機を使い、自力で橋が残った道路の土砂を取り除き、丸一日で孤立状態は解消しましたが、長引けば深刻な事態でした。発電機を運び電気を復旧し、備蓄していた飼料があったため、牛に被害はなかったですが、幹線をはじめ道路被害が甚大で、当分は大型トラックで飼料が運べませんでした。やはり、緊急時に備えた道は必要で、特に幹線は1本ではなく、2本ないといけません。山陰道の必要性を強く感じました。

つながれば夢広がる

飼料の調達だけでなく、高速道路は、出荷にも重要です。主に東京に向けて出荷していますが、牛は暑さに弱いので、特に夏場は車が止まると熱がこもり、牛がばててしまいます。車を動かし続けることが必要ですが、一般道では止まることが多く、ばてた牛が座り込み、他の牛に踏まれてしまうこともあります。

しかし現状を見ると、山陰道の整備は進んでいません。特に益田－萩間は事業化もされておらず、いつ開通するか見通しも立ちません。牧場では毎日、120トンの飼料を使い、トラック1台分の牛、40トンの牛乳を出荷し、その他にも牛フンを使った堆肥も出荷します。TPP（環太平洋連携協定）などで、今後、コスト競争の激化が見込まれるなか、対応していくには、運送効率をさらに高めていかなければなりません。山陰道がつながれば、沿線にある3牧場では、理想的な供給、出荷ルートができ、競争力強化につながるかと期待しています。そして、道は途切れていては意味がなく、つながることで、そこから広がる夢や可能性もあるはずで。

一番のデメリットは道の悪さ

益田市と萩市（山口県）の3牧場で、約1万頭の肥育牛、乳牛を飼育しています。この地域は、人の往来が限られ、畜産施設が集中していないため、動物の感染症が広がるリスクが少なく、畜産や酪農を営むのに全国で一番適しています。気候が比較的温暖で、冬の積雪が少ないことも好条件です。



多くの牛舎が並ぶ松永牧場＝益田市種村町

その中で一番のデメリットを挙げると「道」でしょう。道路事情は悪いです。本牧場（益田市種村町）への道路は今でこそ広域農道が整備され、輸入した飼料をコンテナでそのまま運ぶことができますが、以前は狭い道しかなく、4トントラックしか入れませんでした。このため、港でコンテナから大型トラックに移し替えて近くまで運び、さらに小型に移し替え、運んでいました。運送コストは今の約2倍かかり、道がないと、ここまでの規模拡大もできませんでした。畜産にとって、道路はとても重要なのです。

幹線は2本必要

現在、飼料の多くは、山口県の下関港、福岡県の博多港や門司港から調達しています。中国道を通り、山口県的美祿東JCT（ジャンクション）から萩方面に伸びる自動車専用道路を経由し、萩から国道191号を使って運んでいますが、

つなげよう山陰道 ～人、物、命をつなぐ社会基盤～

Memo

自然災害に弱い国道191号



58 豪雨で被災した国道191号人形トンネル＝益田市飯浦町（国土交通省浜田河川国道事務所提供）

国道191号の益田－萩間は、自然災害に弱い弱で、集中豪雨により、甚大な被害を受けてきた。1983年の58豪雨では、土砂が流入し、益田市で3カ所、萩市で6カ所が約2日間、全面通行止めになった。また、昨年7月末の豪雨では、道路が崩れ、阿武町惣郷

一萩市須佐間が約8日間、全面通行止めになり、物流や市民生活に支障をきたした。災害だけでなく、一部区間は、連続雨量によっても通行規制があり、昨年度は基準雨量を超えたため、3回にわたり全面通行止めが発生した。